

パフォーマンス

パフォーマンス、パフォーマンス・アートという言葉から連想されるものは何でしょうか？イギリスでは「live art」「time based art」という言葉が使われるように、そのイメージはライブで行われる表現活動と捉えられることが多いでしょう。パフォーマンス・アートは、自分自身（アーティスト）の表現しようとするメッセージを鑑賞者にダイレクトに伝達する一つ的手段として機能してきました。しかし、メディアとなるテクノロジーが発達するに伴い、その表現方法は、ビデオ、映画、写真、スライド、テキスト、あるいはそれらのコンビネーションなど多岐にわたるものとなり、その定義の領域も広がっています。

美術作品と鑑賞者が出会う時、真の力を持つ作品はアーティストが表現したその時間、場所を超越し、私達鑑賞者の心を揺さ振ります。そして、作品と鑑賞者の間にそのようなアクションが生まれる時、鑑賞者自身はパフォーマーともなり得ます。なぜなら、作品を目の前にし、それを受け取る一人一人は、それぞれが持つ社会的、心理的、文化的文脈からアーティストのメッセージを理解し、自身の背景を重ね合わせた新たなリアクションを生み出すからです。アートのこのような側面から考えると、「パフォーマンス」という言葉はアーティストだけのものでなく、受け手としての鑑賞者の側にも存在するということが気付くのではないのでしょうか。

展示作品「Counter me on」の制作者である宮島達男氏は、「Art in You」というテーマについて、アート作品と人間との関係を次のように述べています。「アート作品は人間のこころと反応して始めてアート（美）として成立するのだ。アーティストだけでは、アート（美）は存在しない。それは、見る人がいてはじめて存在できる。いや、むしろ、見る人と共に、アート（美）を創っているのだ。--Art in You--アート（美）はあなたの中にある--そう、アートは特別な人のものではなく、特別な人のみが理解できるものでもない。アートはすべての人が創り得ることができ、すべての人が理解できるものなのだ。アートは人間によって、開かれていく。」

本企画展では、様々な形態の時間や空間を越えたパフォーマンスを生み出す

作品をご紹介します。

フォーエバー現代美術館
チーフキュレーター 加藤 淳